

SANAAが環境を建築にとりこむ理由

PORTRAIT BY TAKASHI HOMMA TEXT BY AKIO NAGASHIMA



「開く」ことから可能性が生まれる

西沢 ぼくの場合「環境」への関心は、住空間を考えることから始まったように思います。住宅建築をいろいろ考えるうちに、環境の面白さに気づいてきました。「環境」というのは、建築も入るし都市空間も入るし、風土のようなものも入るものです。単に自然とか人工といった具合には分けられない、時間的な長さを持ったものとして意識しています。

都心に建つ一般的な集合住宅は、個別に「閉じる」ことで快適な状態を目指しています。そうすると隣りとの関係を持たない方が快適ということになる。でも大自然の中ならともかく都市はいろんな人が集まって住む場所ですから、むしろ関係を持ちながら快適だという方が都市住宅としては現実的だし、理にかなっているんじゃないかと考えているんです。



森山部 © 西沢立衛建築設計事務所

妹島 建物のセキュリティは重要だとしても、鍵をかけて閉じるというやり方だけではなく、例えば、建物を道路から少しセットバックさせて、間に共有ゾーンを入れながら閉じるとか、建ち方の工夫で街にどうやって参加していくのかを考えることもできると思います。

セキュリティにしても空調にしても、機械を使って解決する方法とは違ったことを考えるべきではないでしょうか。日本人の伝統的な暮らし方からすると、もう少し「開く」ことによる快適さ、新しい人間関係のあり方、建物と都市のあり方を提案できる可能性があるはずだと思うのです。

西沢 都市の住まいに庭や緑があるのは素晴らしいと思います。家の中と庭は、価値観が違う世界です。家の中でミミズが出ると不気味だけれど、庭で見ると自然を感じる。内か外かによって感じ方も会話も違う展開になります。部屋と庭という二つの世界が、自分たちの生活に多様性をもたらしてくれる。そうした違いを拡がりとして意識的にとりこんでいくことは、特に都市住宅においてはとても重要だと思います。

妹島 都心の小さな庭でも、つくって数年もたてばそれなりに木は育って木陰をつくります。最初のうちはそんなに育たないし役割も少ないけれど、光を得られるからどんどん伸びていって、上の方で葉を広げて、大きな影をつくるようになる。そんな具合に緑ひとつでいろんな状態が生まれます。

西沢 家庭に仕事が生まれるのも庭のいいところですね。水をやったり手入れをしたり、うまく育つ場合もあれば枯れてしまうこともあります。忙しい現代社会では家事はなるべくない方がいいものになっていますが、でも家事があるということは住まいにとって大切なことだと思います。

建築の経験が街の経験に開放されていく

妹島 瀬戸内海の犬島で進めている「家プロジェクト」(2008-)は、小さな島の集落にギャラリーなどの空間を点在させていくアートプロジェクトです。そこでも東京とは違いかたちで環境を考えることになりました。

西沢 犬島は町のサイズが小さくて、人間の経験と街の経験

がとても近い。東京に生まれ育っても、東京のすべてが自分の生涯の中に出てくることはまずない。でも犬島の場合は端から端まで歩き切るのに10分ちょっとでしょうか、自分の生活の範囲と町の大きさが合っていて、それが快適です。

島にはフェリーが来ないので基本的に車のない世界です。なので、町が車中心でなく人間中心につくられている。道が狭いからお向かいも近い。それが建築の形式や共同体のあり方を規定しています。「家プロジェクト」では、島の中に現代のフレッシュな材料や建材も登場しているいろいろな時空間が



犬島「家プロジェクト」© 妹島和世建築設計事務所

現れるのですが、すべて身体的なスケールの連続でできています。建材の大きさも、基本的には人力で運ぶことや道幅などから決まっていて、古い建物も新しい建物も同じスケール感を持って連続しています。それは等身大で人間的で、住まう環境としての快適さに繋がっているように思います。

妹島 犬島は小さいので、きっと外から訪問された方でも島を訪れたその日から、親しみを感じられるはず。集落自体は高齢化と人口減少の問題を抱えています。でもアートの活動をしたり、みんなで物語をつくることを通して、犬島という環境はあり続けるのではないかと。ずっとやっていければ何

「建築界のノーベル賞」ともいわれるプリツカー賞を受賞し、国内外で革新的な建物を手がけている建築ユニットSANAA。彼らの建築をひもとくキーワードのひとつ「環境」をめぐる、妹島和世・西沢立衛さんのおふたりに、東京湾岸にあるSANAAの事務所でお話をうかがいました。

じない。内に入る／入らないを超えた建築のあり方というか、町と建築の連続性というのがあると思います。

建築と環境、その境界を超えて

西沢 ルーヴル・ランス(2012)は、ランドスケープでありかつランドマーク、といえいいか。たいへん大きな建造物ですが反自然的なものではなく環境的なもの、周りと調和する建築です。環境に対する僕らの時代の考え方、新しい時代の感受性を記念碑的に実現できないか、と考えていました。

ランスはかつて炭坑で栄えた産業遺産の町ですが、その町の中心にルーヴル美術館の特別なコレクションをもつくる別館を建てるというものです。この建築で苦労した点は、建物のヴォリュームでした。敷地には炭坑の遺構があり、地形としては高低差のある丘になっていて、丘の周りには小さな労働者住宅が並ぶという状況でした。そこに全長450メートルほどの巨大な建物を建てるわけです。

そこでヴォリュームを何分割かに分けてスケールを落とし、それらを地形に沿って並べてゆく方法をとりました。平屋の建物が繋がりがながら、地面の傾斜に沿って並ぶ、というものです。高低差のある地形に沿うので、建物は床が緩く傾斜していきます。大きな建物なので、建物に合わせて地形を造成して平らにすると、真っ平らな滑走路の上の真っ平らな建物になってしまう、インダストリアルで非自然的な印象になってしまう。そこで、逆に地形を造成せず、その高低差のままに建てることにしたのです。建築が柔らかにカーブして、地形をフォローしていく、というアイデアです。



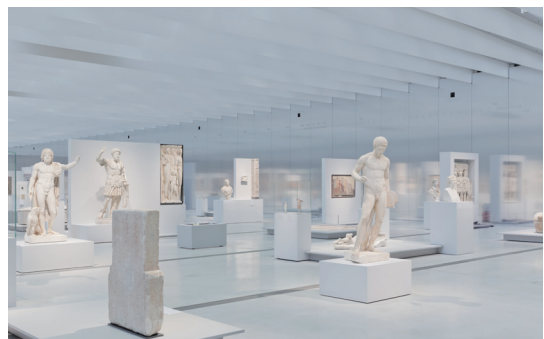
ルーヴル・ランス / SANAA Co - auteurs du Musee du Louvre-Lens : ©SANAA / Kazuyo Sejima et Ryue Nishizawa - IMREY CULBERT / Celia Imrey et Tim Culbert - MOSBACH PAYSAGISTE / Catherine Mosbach Photographie©Hsiao Suzuki

もうひとつ意識したのは、空間として閉鎖していても、経験としては内と外が調和してつながるようにつくることです。

内と外の素材を同じアルミにし、内側では自然採光を天窓から取って同じ光を感じるようにしました。フランドル地方は太陽高度が低くて、空を照らすような独特の陽射しがたいへん印象的な明るさなのですが、ランスの街で感じる光をそのまま建物の内でも感じられるように、と考えました。

妹島 展示の仕方としては、作品群を壁に並べるのではなく、

彫刻のように床の上に各々独立して置く方法にしました。絵も彫刻もすべて床置きの独立展示となり、全体として、大きなワンルームの中に作品群が分散展示され、そこに鑑賞者が入って行く、いわばアートの森に人が分け入っていくような展示方法です。



ルーヴル・ランス / SANAA Co - auteurs du Musee du Louvre-Lens : ©SANAA / Kazuyo Sejima et Ryue Nishizawa - IMREY CULBERT / Celia Imrey et Tim Culbert - MOSBACH PAYSAGISTE / Catherine Mosbach Museographie : Studio Adrien Gardere Photographie © Iwan Baan

そしてそれらの作品群は紀元前3500年から始まって19世紀まで時間軸に沿って並べられ、ルーヴルのコレクションを通してヨーロッパの歴史を経験する展示になっています。

その展示室の先に、ガラスギャラリーという部屋を作りました。19世紀まで歩いて来て、その先のガラスギャラリーでは現代美術とランスの街の風景を見ることが出来ます。ルーヴル美術館の存在とランスの街をつなげる試みです。

西沢 バリのルーヴル美術館に行くと、皆感動しますが、それは展示だけを観て感動するわけではないと思うのです。まずバリという歴史ある街に来て、セヌ川の見え方があって、ルーヴル宮を見て、中に入ると素晴らしい部屋があって作品があって、いろいろ経験して一日を終えてホテルに戻って来て、今日はよかったなあと思う。アートと建築、街の経験というものはそんな具合に連続していて、その全体を人は経験している。ルーヴル宮は建築としてはもちろん閉じた空間ですが、経験としてはバリあつてのルーヴルだし、バリの美しさとルーヴルの魅力とは分けたいと思うのです。

やはり建築は、建築単体で存在するのではなく、環境と連続していると思います。人は建築や都市というものをひとつの時空間として経験しているのです。そこから建築や街のあり方を考えたいと思っています。そのような意味でも、こういう街にどう建築が建つか、どんな環境にどんな建築が建つかということは、僕らにとっては重要なことなのです。

SANAA

妹島和世と西沢立衛による日本の建築家ユニット。2004年ヴェネチアビエンナーレ国際建築展 金獅子賞、2010年プリツカー賞など数多くの賞を受賞。代表作に、金沢21世紀美術館をはじめ、ディオール表参道、ニューミュージアム(ニューヨーク、アメリカ)、ルーヴル・ランス(ランス、フランス)など。また、展覧会や家具デザイン、空間構成なども幅広く手がける。

Case

SANAAが基本構想を手がけた森ビル分譲レジデンス「Case」(設計・施行=清水建設)が、2013年2月、東京・渋谷区神山町に完成した。渋谷の街から緑豊かな東大駒場キャンパス方面に丘を登りきると、地上3階地下1階全6戸の低層住宅が見えてくる。周囲の環境に連続しながら、同時にランドマークとして屹立する存在感が何よりもまず印象的だ。コンセプトは「プライバシーと開放

感を両立させながら、スタイルと快適性の境界を飛び越える」。各戸に備えられた庭と、採光、通風、空間の奥行きを実現するためのカーブした壁など、今回SANAAのおふたりにうかがった「環境をとこむ建築」の構想を随所に見てとることができるとりになっている。現在モデルルームが公開中(予約制)とのこと。
www.case-kamiyama.com

